

1. はじめに

アルゼンチン共和国（以下「アルゼンチン」）が位置する南アメリカ大陸南部は、もともと先住民人口密度が希薄で、大航海時代以降はスペイン出身者の入植地になった。彼らが入植地の地名を命名したため、アルゼンチンの地名はスペイン語由来であるという認識が根強い。しかし、スペインは多民族・多言語国家であるため、入植者の中にはバスク語、カタルーニャ語、ガリシア語などの話者集団も含まれた。同胞の強い結束で知られるバスク人は、大航海時代から 1970 年代にかけて血縁や地縁を頼りに連鎖的に移住し、ブエノスアイレスに世界最大規模のバスクディアスポラを形成した。彼らの移住と現地社会での活躍の記憶は、バスク語地名として現地に刻まれた。こうしたバスク語地名は、多くが国家公用語であるスペイン語の表記形式に変化しており、現地の人々もバスク語由来であると認識していない。しかし、バスク語由来の地名は表記が変化していてもスペイン語地名と識別することが可能である。そこで本研究は、大ブエノスアイレス都市圏におけるバスク語地名を抽出し地図上に示すことで、バスク系移民とその子孫の記憶が刻まれたバスク語地名の言語景観を可視化することを目的とする。

2. 研究対象地域「大ブエノスアイレス都市圏」の定義

2.1. アルゼンチンの行政区画

本研究の研究対象地域は大ブエノスアイレス都市圏であるので、アルゼンチンの行政区画を説明しつつ、本研究で扱う大ブエノスアイレス都市圏を定義する作業からはじめる。アルゼンチンは南アメリカ大陸南東部に位置する。同国政府が公表する国土は、面積が 376 万 1274 平方キロメートルに達する（図 1）¹⁾。人口は、センサス局の発表によれば、2022 年 7 月 1 日時点で 4623 万 4830 である。

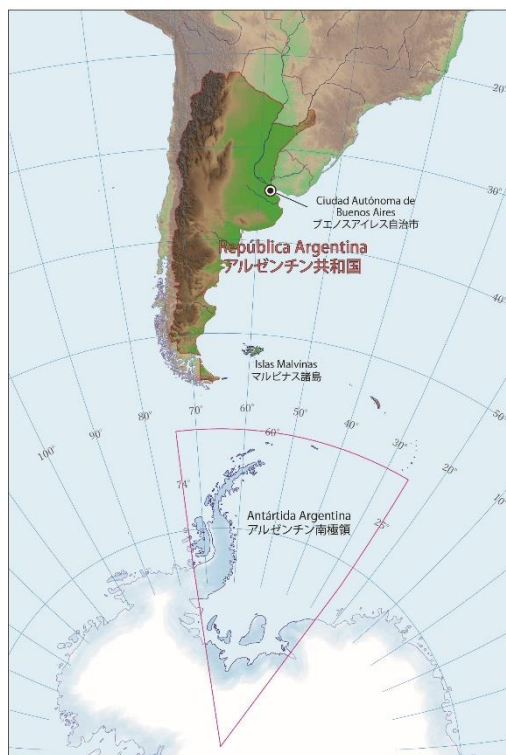


図 1 アルゼンチン国土地理院によるアルゼンチン共和国の領土

アルゼンチンの行政区画は3階級で構成されている。行政区画は人口統計上の単位地区にも対応するため、政府とセンサス局の定義に基づいて説明する。

第1級行政区画は、23の州と1つの自治市により構成される（図2）。州は国家公用語スペイン語で *provincia*（プロビンシア）と表記され、直訳すれば「県」であるが、アルゼンチンは「憲法により自治権を与えられた *provincia* の連邦として構成される」と定義されているため、「州」の訳語のほうが適する。州政府は、知事が率いる行政府、立法機関の州議会、司法機関の司法府で構成される。

もう1つの第1級行政区画は、「ブエノスアイレス自治市」（*Ciudad Autónoma de Buenos Aires*; 略称 CABA）である。ブエノスアイレスは1816年の独立以降アルゼンチンの首都であったが、行政上はブエノスアイレス州の管轄下にあったところ、国家政府が1880年に同州から独立させ国家の直接管理下に置くために設立したのがブエノスアイレス自治市（以下、ブエノスアイレス市）である。

第2級行政区画は「郡」に相当し、全国が550区画に分けられているが、上位の第1行政区画により呼称と性格が異なり、3種類存在する。その1つが、ブエノスアイレス市を構成する15の *comuna*（コムーナ）である（図3）。コムーナは市当局から分限された行政・立法・司法権を行使する権限を持ち、選挙区としても機能する。したがって東京都の特別区に類似した性格の単位といえる。もう1つがブエノスアイレス州を構成する135の *partido*（パルティド）である。パルティド自体は行政権を持たないものの、第3級行政区画の基礎自治体と一致するために、実質的に行政単位として機能する。最後がブエノスアイレス州を除く全国22の州の下位行政区画である380の *departamento*（デパルタメント）である。ブエノスアイレス州以外のデパルタメントは独自の行政機関は持たず、地籍や統計の単位として機能するほか、一部では学区、警察管区、選挙区としての性格を持つ。これら3種類の第2級行政区画のうち、ブエノスアイレス市を除く2つは、定義は異なれども複数あるいは単体の基礎自治体により構成される点では同じなので、本研究ではブエノスアイレス市のコムーナ以外の第2級行政区画を「郡」と呼ぶことにする。

第3級行政区画が日本の市町村に相当する *municipio*（ムニシピオ）である（図4）。地方自治の最も基本的な自治体のため、「基礎自治体」の定義に該当する。ただし、基礎自治体としての自治の機能を保証されるかどうかは各州の法律で要件を満たす人口規模などが定められているため、人口密度

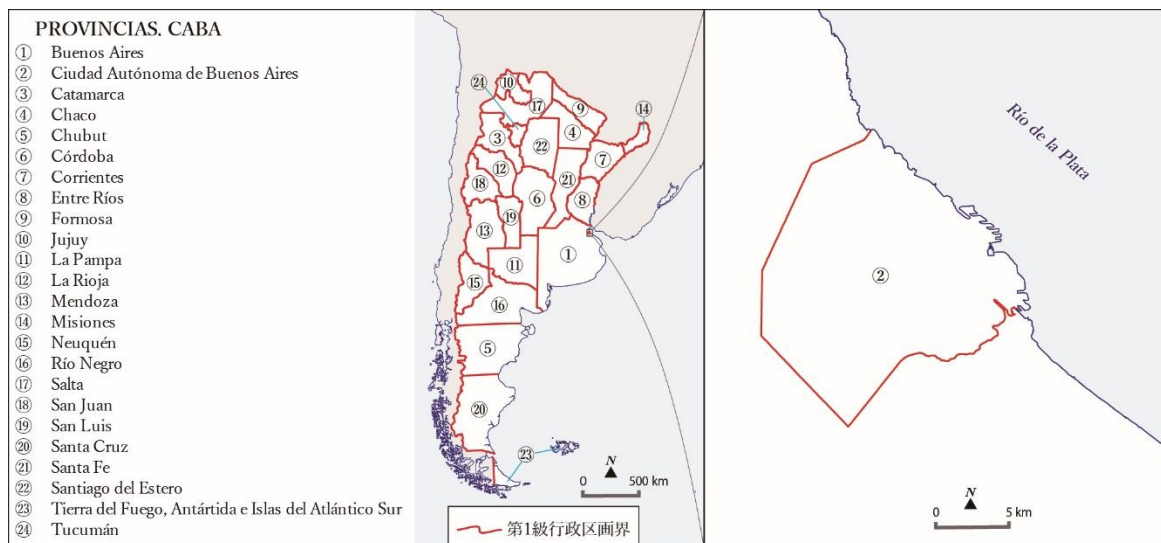


図2 第1級行政区画（州とブエノスアイレス自治市）

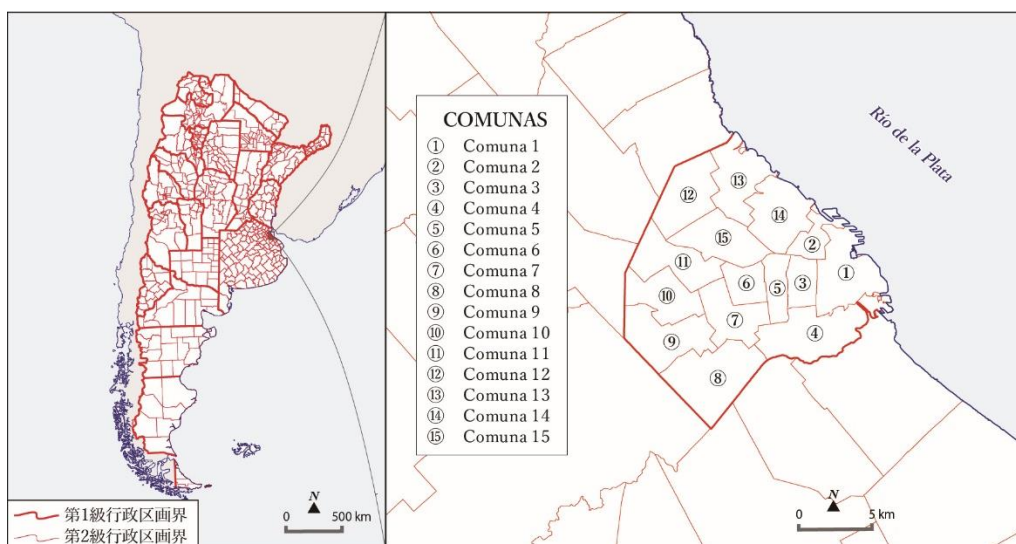


図3 第2級行政区画（郡，コムーナ）

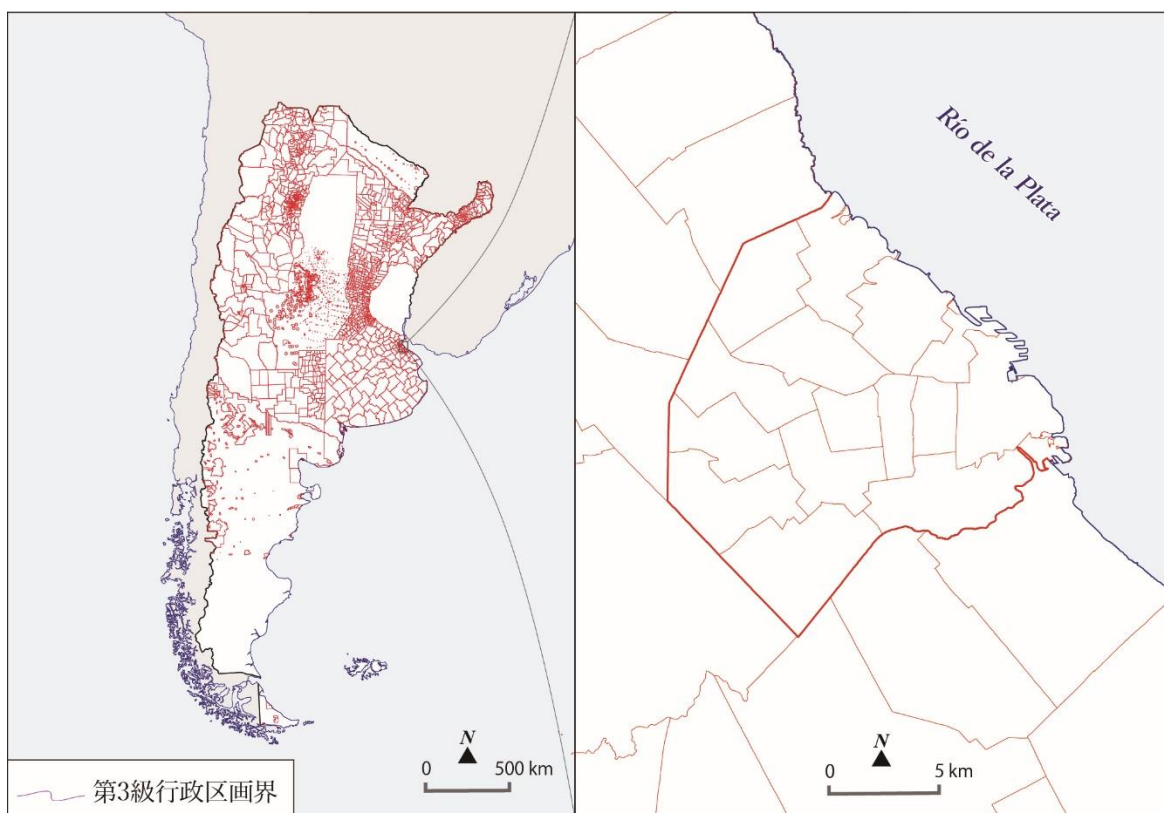


図4 第3級行政区画（基礎自治体）

の希薄な地域にはムニシピオが存在しない。本研究では「基礎自治体」と呼ぶが、ブエノスアイレス州の場合は「郡」がひとつの「基礎自治体」により構成されるため、「郡」と呼ぶことにする。

これら3つの階級は行政単位地区であるが、さらにこの下位に伝統的地域観に基づく小地区がある。第3階級行政区画の直下の単位地区が *localidad* であり、本研究では「地区」とよぶ。さらにその下に *barrio* と呼ばれる小地区があり、本研究では「街区」と呼ぶ。

「地区 *localidad*」は、1869 年の第 1 回センサス時にセンサス局が導入した小統計単位地区である。この当時からセンサス局はこの単位地区レベルの統計情報を公表してきたが、1970 年センサスまでは明確な定義がなく、同センサスではじめて「主要道路や運河などの交通網により囲まれた範囲で設定された地区」と定義された。統計単位としての「地区」は、1869 年の地区の範囲を基本的に踏襲し、最新の 2022 年センサスまで引き継がれている。「街区 *barrio*」は、伝統的地域を基準とした単位地区で、ブエノスアイレス市の街区は 19 世紀の教会教区を起源にしている。

2.2. ブエノスアイレス都市圏の諸定義

ブエノスアイレスの都市圏には様々な定義が存在する。本研究で定義する「大ブエノスアイレス都市圏」を定義したうえで、本研究に関わる他の都市圏を紹介する。

① ブエノスアイレス広域都市圏 (Conurbano Bonaerense)

ブエノスアイレス市を中心に連続的に広がる都市的地域を含むコナベーション、いわゆる広域都市圏は、20 世紀前半から「ブエノスアイレス広域都市圏 *conurbano bonaerense*」と呼ばれてきた。現在この用語は、主に行政や都市計画の分野で用いられている。この領域の法的定義がはじめて定まったのは 1948 年で、ブエノスアイレス市の周囲に広がる郡 (ブエノスアイレス州) における広域都市計画の必要性から 1948 年州法 70 号により定義された。その当時は都心のブエノスアイレス市とそれに隣接する州内の 14 の郡により構成された²⁾。その後、5 度の法改正を経て、2006 年に法的に定義された最新のものは、ブエノスアイレス市と 33 の郡により構成されている³⁾ (図 5)。

② 大ブエノスアイレス都市集積 (Aglomerado Gran Buenos Aires: AGBA)

センサス局が実質的な都市的地域や人口集積地域として設定した都市圏が、「大ブエノスアイレス都市集積」である (図 5)。これはセンサス局が前出の「地区」を利用して定義した実質的な都市的地域に相当する。センサス局は地区の人口統計を把握しているが、連続する都市的地域に含まれる複数の地区を「*aglomerado* (集積)」と定義している。集積の人口が 10 万を超える場合、中心となる地区名に「Gran (大)」を付すことになっており、そのためブエノスアイレスの連続した都市的地域は、*Agglomerado Gran Buenos Aires* (大ブエノスアイレス都市集積) と呼ばれる。

③ 大ブエノスアイレス (Gran Buenos Aires: GBA)

Gran Buenos Aires (大ブエノスアイレス) は、都市集積を含む郡で定義した都市圏である。センサス局がこの定義を用いるようになったのは 1939 年である⁴⁾ (INDEC 2024, 7)。1970 年に *aglomerado* (都市集積) の定義が確立すると、「大ブエノスアイレス」は、「ブエノスアイレス市と、都市集積に完全あるいは一部が含まれる郡」の範囲として再定義された。注意しなければならないのは、現在の「大ブエノスアイレス都市集積」は、ラ・プラタ市を中心とする *Aglomerado Gran La Plata* (大ラ・プラタ都市集積) と連続して 1 つの都市的地域を形成しているが、1970 年当時はそれぞれが独立した都市的地域であったため、現在でも「大ラプラタ (図 6 参照)」に含まれる郡は、大ブエノスアイレ

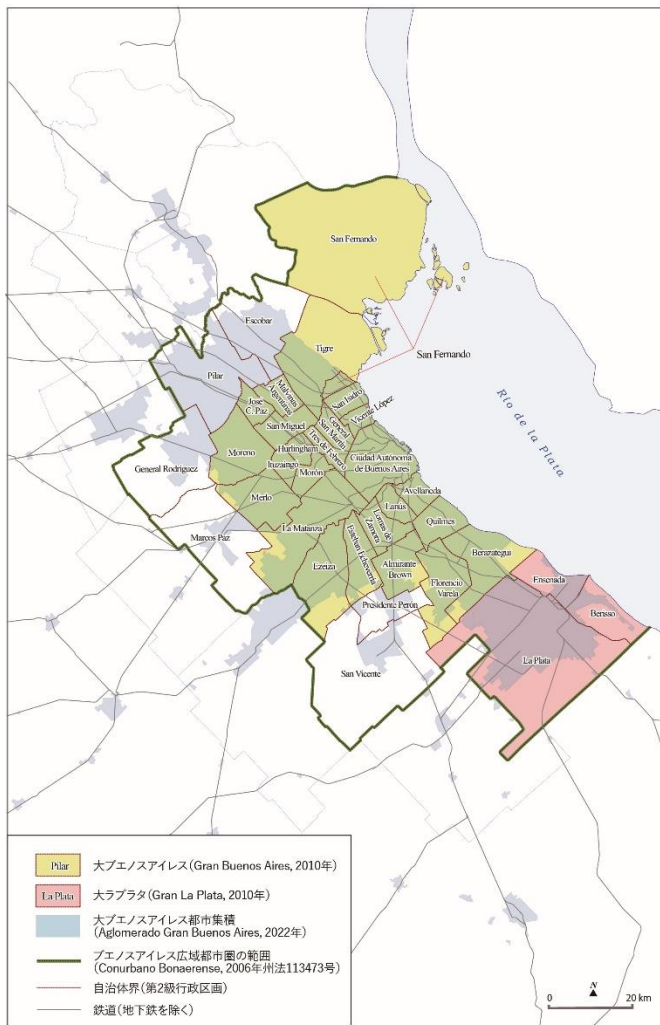


図5 ブエノスアイレス広域都市圏（2006）
大ブエノスアイレス都市集積（2022）
大ブエノスアイレス・大ラプラタ（2010）

出所) INDEC (2003, 2024)などにより作成。

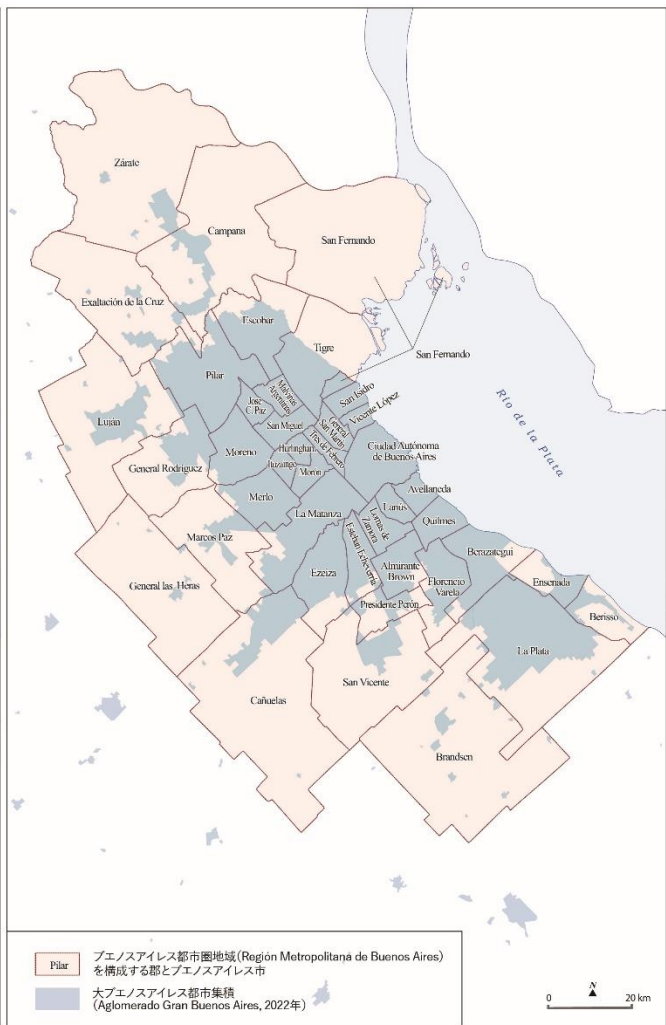


図6 ブエノスアイレス都市圏地域と
大ブエノスアイレス都市集積（2022）

出所) INDEC (2024)などにより作成。

スに含めない。なおセンサス局は、2010 年センサスまで大ブエノスアイレスを基準としたデータを公表していたが、2022 年センサスからは前述のブエノスアイレス都市圏地域に代わっている。2010 年センサスの大ブエノスアイレスは、ブエノスアイレス市と 24 の郡により構成されていた（図 6, INDEC 2003, 4）。

④ ブエノスアイレス都市圏地域（Región Metropolitana de Buenos Aires: RMBA）

現在、都市計画、都市行政、統計情報の把握などで最も汎用性の高いのが Región Metropolitana de Buenos Aires（ブエノスアイレス都市圏地域）である。センサス局は Región Metropolitana という用語を 1985-1986 年の家計調査報告で使っていたが、当時の定義はあいまいであったうえに、2001 年の人口センサスでは Región Gran Buenos Aires という用語も登場し、複数の都市圏用語が混乱していた。

こうした状況を整理しつつ、さらにブエノスアイレスの都市的地域が南に隣接するラ・プラタ市を中心に広がる都市圏「大ラ・プラタ」とつながりつつある状況を鑑み、広域都市圏を再定義するために2010年センサスから取り入れた用語が *Región Metropolitana de Buenos Aires*（ブエノスアイレス都市圏地域）である。最近の各省庁や自治体の主な都市計画は、この範囲をブエノスアイレスの都市圏として扱っている。

2010年センサスで定義されたブエノスアイレス都市圏地域は、ブエノスアイレス市とブエノスアイレス州内の31の郡で構成された⁵⁾。しかしその後の都市集積の郊外への拡大と大ラ・プラタ都市集積との合体を反映して、2022年センサスではブエノスアイレス市を含め40の自治体で構成されるようになった（図6）。面積は1万3267平方キロメートルに達し、2022年センサスによれば、人口は1636万6641、全国人口の35.7%を占める⁶⁾。

以上のように、ブエノスアイレスの都市圏を定義する用語は様々だが、本研究では最後に説明した「ブエノスアイレス都市圏地域 *Región Metropolitana de Buenos Aires*」を研究対象地域として採用する。理由は、大ブエノスアイレスと大ラプラタの連続する都市集積により定義され都市圏の実情を的確に反映した地域概念であると判断できるうえ、現在の研究や政府報告書で最も採用頻度の高い都市圏の定義であるためである。そのうえで、センサス局が定義する40の自治体で構成される「ブエノスアイレス都市圏地域 *Región Metropolitana de Buenos Aires*」を、本研究が独自に定義する用語としての「大ブエノスアイレス都市圏」と呼ぶことにする。

3. バスク地方とバスク語地名

3.1. バスク系移民の出身地：バスク地方

大ブエノスアイレス都市圏にみられるバスク語地名は、バスク系移民の出身地であるバスク地方に由来する。バスク地方は、スペインとフランスの国境地域、ピレネー山脈西部に位置する。バスク地方は、現地で話されるバスク語で *Euskal Herria* と表記される。その意味は、*Euskara*（「バスク語の」あるいは「バスク語話者の」）と *Herri*（「国」）であり、つまり「バスク語を話すバスク人の国」である。この地名からもわかるように、バスク地方を他地域から識別するマーカーは「バスク語」である。バスク語の話される地域の周辺では、ラテン語に起源をもつインド・ヨーロッパ語族イタリック語派ロマンス諸語が話されている（図7）。

バスク語はインド・ヨーロッパ語族どころか世界中のどの語族にも属さない孤立言語であり、そのため、バスク語話者共同体の存在するバスク地方では独特の文化が育まれてきた。したがって、バスク地方はバスク語とバスク文化に特徴づけられる文化地域であるといえる。その地理的範囲を、既存の行政領域に対応させて説明すると、図8のようになる。面積は2万664 km²で、四国より若干広い領域に約320万人が住む⁷⁾。スペイン側のバスク地方は、「スペイン領バスク」あるいはバスク語で「南の部分」を意味する *Hegoalde*（エゴアルデ）と呼ばれ、本研究では「南バスク」と呼ぶ。現在の行政領域では、スペインを構成する17の自治州のうちの2つ、*Euskadi*（バスク州）と *Navarra*（ナバラ州）により構成される。バスク州は *Bizkaia*（ビスカヤ県）、*Gipuzkoa*（ギプスコア県）、*Araba*（アラバ県）の3県に分かれるが、ナバラ州は1つの県で1つの州を構成する。フランス側のバスク地方は、「フランス領バスク」あるいはバスク語で「北の部分」を意味する *Iparralde*（イパラ



図 7 現代イベリア半島の言語地図



図 8 バスク地方と対応する行政区画

出所) Burgueño (2002, 184)を一部修正.

ルデ)と呼ばれ、本研究では「北バスク」と呼ぶ。ピレネー・アトランティック県に属する3つの領域である Lapurdi (ラプルディ), Nafarroa Beherea (ナファロア・ベエレア), Zuberoa (スベロア)から構成されるが、これらは中世に存在した歴史的領域であり、現在の行政区画に対応しているわけではない。

かつてバスク語は、ピレネー山脈西部を中心とする広い領域で話されていた。しかし、仏語やスペイン語などの周囲の言語の勢力圏が拡張するにつれてバスク語が話される領域は徐々に縮小し、現在では国境付近の狭い領域で話されているに過ぎない(図9)。

大航海時代以降イベリア半島からは、移民がそれぞれの言語的属性をともなう南北アメリカ大陸へ移住し、それにバスク人も含まれた。彼らの移住の記憶がアルゼンチンのバスク語地名に反映されるのであるが、その特徴を知るにはバスク語やバスク語地名についての理解が必要である。

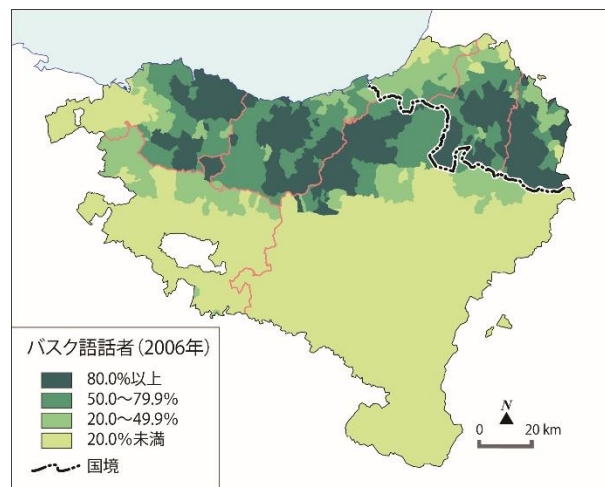


図 9 バスク地方におけるバスク語話者の分布(2006)

出所) Kultura Saila (2008, 217)により作成.

3.2. バスク地方のバスク語地名

孤立言語であるバスク語は、他言語と異なる統語論的、意味論的、音韻論的特徴を有する。そのためバスク語の地名もロマンス系諸語と異なる特徴を持つ。

バスク語地名の最大の特徴は、家系名（以下「姓」）と地名の関係が強く、姓と同じ地名が豊富に存在することにある⁸⁾。これは、スペイン語や英語などに職業姓（鍛冶屋を表す英語の Smith あるいはスペイン語の Herrero など）が多いのに対してバスク語ではそれがあまりみられないこととともに、バスク語地名の特徴の1つになっている。

ここでいうところの地名は、正確には住居地名（英語の *oyconym*, 独語の *hofname*）である。日本の「家名」のように家系を含んだ意味でも使われ、「屋号」のように住宅そのものを指すこともあるが、意味するところは広い。

バスク地方の伝統的な住宅家屋は、複層階で構成される石造りの巨大な直方体に屋根を乗せた構造で、そこにかつては複数世代の家族が同居した。さらにその周囲には菜園や牧草地が広がるため、隣接する民家から距離をとって立地する。バスク語で *baserri* (バセリ), スペイン語で *caserío* (カセリオ) と呼ばれ、日本語に訳すなら「孤立荘宅」である。この住宅に固有の名前が与えられるが、その名前の及ぶ範囲は住宅周辺の菜園から牧草地まで、家族の生活の舞台となる空間全体に達する。南北アメリカのランチョあるいはエスタンシアが家屋と牧場を含む所有地全体に名称が与えられるのに類似する。かつてバスク地方では、そこに住む人々を、父姓や母姓などの家系名ではなく、住居地名で呼んだ⁹⁾ (Gorrotxategi 2023, 6)。それが慣習化して、住居を含む範囲の土地に与えられた地名が彼らの姓に転化していった¹⁰⁾。

バスク語の意味が分かれば、住居地名から派生した姓の意味も理解できる。例えば、バスク語で家を *etxe* (エチェ), あるいは冠詞-a を語尾に付けて *etxea* (エチェア) と表記するが, *Tellaetxe* (石壁の家) や *Ormaetxe* (木壁の家) のように素材, *Goikoetxea* (上の家) や *Beaskoetxea* (下の家) のように位置, *Errotaloetxea* (粉ひきの家) のように家の機能, *Abadetxea* (司祭の家) や *Beratarrechea* (聖職者の家) のように家主の属性など, 姓から住居に関する情報がわかる。

あるいは住宅空間の周囲に広がる景観も含めて表現した姓もある。例えば, *Aristizabal* (広い桧林) や *Oianeder* (美しい森) のように植生, *Azkonobieta* (穴熊の巣) や *Behotegi* (厩) のように動物相, *Aranguren* (美しい谷) や *Mendibil* (丸い山) のように地形, *Sagasti* (リンゴ園) や *Soloa* (鋤) のように土地利用など, 住居周辺の景観を理解することができる姓も多い。

別のケースとして, 姓と集落地名の組み合わせで構成される姓もある。例えば *Ladrón de Guebara* (Guebara 村の Ladrón) や *López de Eulate* (Eulate 村の López) のように, 前者が父姓, 後者が集落地名により構成される姓である。これらのケースでは全体が次第に姓を表すようになり, 集落地名が姓に組み込まれていった。

3.3. バスク人移住先の新大陸におけるバスク語地名

新大陸の地名は、先住民由来の地名が一部残るものの、大航海時代以降の入植者が命名したものがほとんどである。ラテンアメリカの場合、入植時の統治主体の言語であるスペイン語やポルトガル語で命名された地名が多い。そうした環境下でもバスク語地名は確実に存在する。

バスク語地名について、Gorrotxategi (2023) は 3 つの由来があるとしている。第 1 に、地名のもっとも一般的な命名法であるが、その場所についての説明がそのまま地名に転化したものである。ただし、スペイン語のように入植者の大多数の使用言語によって命名された地名は多数存在するが、バスク語は一部の入植者しか使用しなかったため、バスク語話者が入植しなかった地域でバスク語地名が命名される可能性はない。バスク語による場所の説明が地名になった具体例は、ブエノスアイレスを含むラテンアメリカではほとんど見られないが、Gorrotxategi (2023, 9) はカナダのニューファウンドランドに現在残る地名のうち、Port-au-choix, Barachois, Ingunachois はもともとバスク語の Portutxoa (小さい港), Barratxoa (棒), Ainguratxar (悪い錨) が、後に仏語話者が仏語風に修正したものであるとしている。ニューファウンドランドには、かつてバスク人漁師の漁業基地が存在した。バスク人は 1530 年代ごろからタラ漁や捕鯨を目的にこの海域に進出し、沿岸に漁業基地を設営して、各地にバスク語地名を与えた。この海域でのバスク人の活動は、1713 年のユトレヒト条約でニューファウンドランド島がフランス領からイギリス領になるまで続き、当時の彼らの活動の痕跡を地名が記憶しているのである¹¹⁾ (Loewen and Delmas 2012)。

第 2 のケースとして、バスク地方の地名をそのまま転置するケースである。入植地が新たに開拓される場合に入植の指導的立場にある人物の出身地と同じ地名を与えるケースがこれにあたる。しかし、こうした地名はラテンアメリカ全域でみても少ない。

最も多いのが第 3 のケースで、人物の姓名の地名への転換である。国家や都市の歴史において功績のあった人物に敬意を表して、その姓名を自治体の名称とするケースは、ラテンアメリカでは頻繁にみられる。あるいは入植初期から最近までよくあったのが、土地所有者の名前をその土地の地名として命名するケースである。姓名を地名として用いる場合、姓と名の両方を地名とすることが多いが、姓のみを用いるケースもある。ラテンアメリカ各地でみられる Bolívar (ボリバル) がその典型である。Bolívar は南アメリカのアンデス諸国を独立に導いた政治指導者であり、現在のバスク地方ビスカヤ県のバスク人家系に生まれた。ラテンアメリカ諸国の自治体は彼の功績にちなんでその姓名を自治体名称に用いるケースが多々あるが、彼の姓名は Simón Bolívar であるところ、言語の経済性を優先して姓の Bolívar のみを用いる自治体が多い¹²⁾。ちなみに Bolívar は、バスク語の混成語であり、bolu (粉ひき場) と ibar (谷) を合わせて「粉ひき場のある谷」が本来の意味である。

こうした人名由来の地名は、バスク地方ゆかりの聖人名である場合もある。例えばラテンアメリカでよくみられる Javier と Loyora が含まれる地名は、イエズス会の創始者フランシスコ・ザビエルとイグナティウス・ロヨラ (スペイン語で Francisco Javier, Ignacio de Loyora) にちなんでいる。ザビエルはバスク地方のナバラ西部出身の貴族の家系で、彼の生まれた城が立地する自治体は現在 Javier (ハビエル) と呼ばれているが、彼の名前はもともとバスク語で Xabier (シャビエル) と表記し、xa は etxe (家) の短縮形、bier は berri (新しい) の変化形であり、「新しい家」つまり新宅を意味するバスク語であった。Loyola のバスク語表記 Loiola は、現在ギプスコア県中部に位置する彼の生誕地

の地区名になっており、バスク語で loi は lohi（泥）の変化形、ola は「製鉄所」あるいは「鍛冶屋」を意味し、全体で「泥地の製鉄所」を意味する。

4. アルゼンチンの地名表記とバスク語地名

4.1. アルゼンチンにおけるバスク語地名表記の特徴

アルゼンチンの地名研究の歴史は古く、Ardissone (1922)をはじめとする数多くの業績の蓄積がある。しかし、アルゼンチンのバスク語地名に携わった研究者はわずかで、現地図書館で調査しても Juliarena (1998, 1995, 1993) が存在する程度である。バスク語地名研究を難しくする要因は、先行研究の少なさのみではなく、地名表記にもある。そもそもアルゼンチンの地名は、国土地理院が示す「アルゼンチン共和国の地理的名称の定義の原則とガイドライン」によれば、次に示すように、ローマ字地名の場合は原語表記が優先される。

2.2.2 地理的名称 (Nombres Geográficos: NG) 表記体系

表記体系は、「アルファベット、音節、または表意文字の書記体系のアルファベット、音節、または表意文字の辞書を構成する一連の図形記号を通じて、言語の音韻論的および形態論的要素を表す方法」である。この意味で、アルゼンチン共和国の地理的名称はこれを採用する。基本的には、スペイン語、伊語、独語、蘭語、仏語、葡語、デンマーク語、ウェールズ語、露語などの地名など、アルファベット表記体系の言語に適用される。例外は少なく、ブエノスアイレス市の公共スペースの一部の地理的名称、や中国語（表意文字表記システム）の道路の地理的名称がその例である。これらはスペイン語で読めるようにローマ字表記を含める（例：ブエノスアイレス自治市中華街の北京広場 Plaza Beijing）。(IGN 2024, 7)

3.12. 言語形式

スペイン語以外の他の言語に対応する地名は、アクセントや発音記号を含む本来の表記が維持される。例えばサンタクルス州の Tannhäuser（タンホイザー）湖は、地名の言語であるドイツ語で a の上に 2 つの記号（ウムラウト [本文になし]）を付けて書く必要がある。(IGN 2024, 7)

こうした規則があるものの、アルゼンチンのバスク語地名はバスク語正書法による表記が維持されていない。主な原因は、バスク地方における周囲の言語との言語接触過程での表記変化、さらにバスク人がラテンアメリカ入植時に経験したさらなる言語接触による表記変化にある。バスク地方において地名あるいは姓としてよくみられる Etxeberria を例に説明しよう。「新しい家」を意味するこの地名は、末尾の a がバスク語の冠詞なので、Etxeberri という表記も存在するが、これはバスク語本来の変種である。しかしスペイン語圏では、txe と b の表記が che と v になるうえ、語尾から 2 番目の音節を強く発音するためアクセント記号が加えられ Echeverría となる。これが仏語圏では仏語風の表記 Etcheverry や Echeverry に変化する¹³⁾。さらに語頭の E が欠落したり、E が発音の似た H や I に置き換えられる場合もある。こうした様々な変種がラテンアメリカに持ち込まれたため、南バスクからの入植者が多い地域ではスペイン語風の変種が、フランスの北バスク出身者が多く入植した地域では仏語風表記が用いられるようになった¹⁴⁾。

さらに困難さを助長するのが、バスク語の住宅地名の豊かさである。バスク語アカデミー（Euskaltzaindia）がデータベース化しているバスク語姓は10978に達し、そのほとんどが住宅地名としても使われている¹⁵⁾。

そのためバスク語地名の特定は、ブエノスアイレスの地名の中から変種を含めたバスク語の要素を抽出する作業になり、バスク語の言語学や地名学の専門家でなければ不可能な作業である。そこで本研究でバスク語地名を特定する作業では、バスク語アカデミーの地名研究者ミケル・ゴロチャテギ（Mike Gorrotxategi）の協力を仰いだ。

4.2. アルゼンチンの地名の特徴

アルゼンチンの地名はほとんどがスペイン語で表記されているが、その表記方法にいくつかの特徴がある。バスク語地名はそうした中に組み込まれているために、アルゼンチンの地名の特徴を知ることとはバスク語地名の理解につながる。

アルゼンチンの地名の由来は、主なものとして①人名、②地名、③記念日の3つがある。

① 人名

人名を地名に転換する方法は、アルゼンチンにおいてもっとも典型的な地名の命名法である。そのうえ人名由来の地名は、最上位の自治体である第1級行政区画「州」からミクロな地区、街区、街路の名前まで、幅広くみられる。よく用いられる人名が、独立の功績者などの歴史上の人物、その土地の開発者あるいは所有者である。

人名由来の地名の表記にはいくつかの種類がある。姓のみの地名がよくみられるが、第1姓（父姓）のみの場合もあれば、第1姓と第2姓（母姓）を併記する場合もある。稀ではあるが祖父母の姓も含む場合もある。

人名の前に職位階級や称号が追記される場合もある。職位階級を伴う地名は主に軍人の姓名由来である。例として、第2級行政区画であるブエノスアイレス州の郡であるヘネラル・アルバラード（General Alvarado）は、独立戦争時の英雄 Rudecindo Alvarado（ルデシンド・アルバラード、1792-1872）の軍の階級「将軍（General）」を姓の前に付したものが郡名になっている。ブエノスアイレス州を構成する135の郡のうち、Generalと（名と）姓により構成される郡名が16、Coronel（大佐）と姓名により構成されるものが4つ存在する。同様に、ブエノスアイレス州の郡Presidente Perónは、Juan Domingo Perón（フアン・ドミンゴ・ペロン：1895-1974）の父姓の前に職位のPresidente（大統領）が付されている。それらに対してJujuy（フワイ州）の第2級行政区画であるLibertador General San Martínは、中南米諸国独立時にリベルタドル（Libertador：「解放者」の意）の称号を与えられたJosé Francisco de San Martín y Matorras（ホセ・フランシスコ・デ・サン・マルティン・イ・モトラス1778-1850）の職位「General（将軍）」の前に称号まで付されている。

San, Santa, Santoといった聖人に用いられる称号が、聖人名とともに地名に含まれる場合がある。これらは「聖なる」を意味し、カトリックの聖人名の前に付される。ブエノスアイレス州113の郡のうち9州がSanではじまる名称を持つ。修道士に与えられる称号Frayではじまる地名（例：Fray Mamerto Esquiú）もみられる。

② 地名

固有地名が別の場所の地名に転置される場合がある。例えば第1級行政区画「州」の名称 Córdoba と La Rioja は、スペインの県名をそのまま転置したものである。また第2級行政区画であるブエノスアイレス州の Malvinas Argentinas (マルビナス・アルヘンティナス郡) の郡名は、マルビナス諸島 (Islas Malvinas, 英語名は「フォークランド諸島」) に由来しており、領有権を争う諸島名に Argentinas (「アルゼンチンの」の意) という形容詞を付すことで、領有を主張する愛国的な地名である。地名由来でよくあるのが、かつての主戦場の地名を転置する例である。例えば、ブエノスアイレス州の Maipú (マイプ郡) の郡名は、チリ軍が独立戦争時でスペイン軍と戦ったチリ国内の主戦場に由来しており、そこでは 1818 年 4 月 5 日にチリの独立を決定づけた「マイプの戦い」があった。この戦いでアルゼンチン軍はチリ軍を支援して戦った。こうした歴史的偉業を成し遂げた場所の地名が各地の地名に転置されることはしばしばある。

一方、街路名や地区名でよくみられるのが、アルゼンチンの州名、他国名、他国の都市名などに由来をもつ地名である。例えば前出の Malvinas Argentinas 郡には Padre Stoppler y Hiroshima という地区がある。地名の由来は不明であるが、国外の都市や自治体名を街路名や地区名に転用する例は多い。

固有の自然地形名を由来とする地名も多い。例えば第2級行政区画には、山岳名 (Cachi [ネバド・デ・カチ岳]), 河川名 (Paraná [パラナ川]), Río Senguerr [セングル川] など、海峡名 (Magallanes [マゼラン海峡のスペイン語名]) などがみられる。

③ 記念日

記念日の日付が地名になるケースは日本ではみられない命名法であるが、アルゼンチンをはじめラテンアメリカ諸国ではしばしばみられる。特に国家的記念日がいられる。ブエノスアイレス州の郡にはそうした例が2つあり、25 de Mayo (5月25日)、9 de Julio (7月9日) と名付けられている。前者はブエノスアイレスで起こった5月革命で副王 Baltasar Hidalgo de Cisneros (バルタサル・イダルゴ・デ・シスネロス) が失脚し、アルゼンチン政府が発足した記念日である 1810 年 5 月 25 日、後者はアルゼンチンの前身であるリオ・デ・ラ・プラタ連合国がスペインからの独立を宣言した 1816 年 7 月 9 日にちなんでいる。記念日を地名に転用する例は上位の自治体では少ないものの、地区名や街路名には多く見られる。

これら3つの主要な命名法のほかにも、いくつか異なる由来の地名がある。その一つが世界各地にみられるもので、地形を含む景観を由来とする地名である。この場合、固有名詞と異なり、地形を表現する一般名詞を用いてその場所の景観を表現している。第1級行政区画の州では Entre Ríos (「河川の間」の意) がそれに該当し、第2級行政区画を例にとれば、谷 (Valle Viejo : 「古い谷」の意)、山 (Monte Hermoso : 「美しい山」の意)、湾 (Bahía Blanca : 「白い湾」の意)、海 (Mar Chiquita : 「小さな海」の意) などがそれにあたる。こうした命名以外にも、歴史的出来事 (Reconquista [1806 年 8 月 12 日ブエノスアイレスをイギリスから奪還した出来事]), 一般名詞 (Libertad [自由], Defensa [防衛] など、国威発揚に関わる名詞が地名として利用される場合がある。

5. 大ブエノスアイレス都市圏のバスク語地名

5.1. 郡名にみるバスク語地名

今回は都市圏を対象とすることから、自然地名を除き、行政地名を対象とする。そのなかでもブエノスアイレス都市圏の、郡名、地区名に限定する。

バスク語のみにより構成される郡名もあるが、一部にバスク語を含む郡名もある。本研究では両者を「バスク語地名」として扱うが、バスク語に由来する地名であるか否かは、バスク語アカデミーの地名研究者に確認を依頼すると同時に、同アカデミーのバスク語固有名詞データベース EODA で確認した¹⁶。そのためこれ以降のバスク語地名の解説は主に同データベースによるものがほとんどであるが、一部は Salazar (1916) や Mitxelena (1989) などのバスク姓研究書の内容も参照した。そうして確認作業を進めたところ、大ブエノスアイレス都市圏を構成する 41 の郡のうち 5 郡でバスク語地名を確認できた¹⁷ (図 10)。地区名に付した通し番号は、図 10 中の番号に対応する。

① Avellaneda (アベジャネダ)

同郡は首都ブエノスアイレス市の南東に隣接する。公式名称 Avellaneda は、バスク州ビスカヤ県の基礎自治体 Sopuerta (ソプエルタ) に含まれる地区の名称を由来とする。ここは中世、ビスカヤ領主国内のエンカルタシオネス郡の政治的中心地であった。当時のビスカヤ領主国は中央のスペイン政府から独立した行政権を行使する権限フエロを与えられ、高度な自治を実践していたが、そのための審議機関がゲルニカに置かれていたことは有名である。同時にエンカルタシオネス郡は、ビスカヤ領主国から一定の自治権を与えられ、その審議機関である評議会がアベジャネダに置かれた。もともとそこには地域の有力家であるアベジャネダ家の居城があり、それがのちに評議会議事堂に転用された¹⁸。

アベジャネダ郡は 1700 年代にブエノスアイレス南の沿岸地域に開発された港湾地区を起源とし、1906 年までは Barraca al Sud (バラカス・アル・スッド:「南バラック小屋」の意) と呼ばれていた。Vilella (2016) によれば、アベジャネダ家は 1600 年代から 1700 年代初めにかけてラ・プラタ川流域に入植した一族であるが、現在の郡の公式名称は、Nicolás Remigio Aurelio Avellaneda (ニコラス・アベジャネダ大統領: 任期 1874-1880) の功績にちなんで彼のバスク姓に由来としている¹⁹。

② Berazategui (ベラサテギ)

ベラサテギ郡は、アベジャネダ郡の南東部に位置する。現在の公式名称である Berazategui は、-za- と -gui がスペイン語表記に変化しており、バスク語正書法では Berasategi と表記する。南バスクのギプスコア県やビスカヤ県によくみられるバスク姓で、語源については諸説あるが、Gorrotxategi (2023, 16) によれば、個人名 Beraxa と「家」を意味する -tegui の混成姓で「ベラシャの家」を意味する。かつては Quilmes (キルメス郡) の一部だったが、1960 年に分離され、現在の公式名称が与えられた。郡名の由来は、この付近に都心からの鉄道が延伸した際に鉄道会社に所有地を提供した土地所有者 José Clemente Berazategui (ホセ・クレメンテ・ベラサテギ: 1816-1892) のバスク姓にある。提供地に建設された駅が「ベラサテギ駅」と命名され、その駅名が駅前地区を代表する地名となり、1960 年の郡独立の際に郡の公式名称に採用された (Downes 2010, 98)。

③ Esteban Echeverría (エステバン・エテェベリア)



図 10 バスク語地名の郡

注) 郡名称は国土地理院 IGN のデータベースによる。

エステバン・エテェベリア郡は、ブエノスアイレス市の南に位置する。同郡は 1913 年に Lomas de Zamora 郡（ロマス・デ・サモラ）から分割されたが、創設時にアルゼンチンの著名な作家 Esteban Echeverría の功績にちなんで命名された²⁰⁾。前半の Esteban はスペイン語の名前であるが、後半の Echeverría は、先に説明したように「新しい家」を意味するバスク姓であり、バスク語正書法では Etxeberria と表記する。

④ Ezeiza（エセイサ）

エセイサは、エステバン・エテェベリア郡のさらに南に位置し、1994 年に同郡から分割され新設された。エセイサ国際空港が立地するため、アルゼンチンに入国する旅行者になじみの地名である。郡の公式名称は、かつての土地所有者 José María Ezeiza（ホセ・マリア・エセイサ）の人名に由来する²¹⁾。エセイサは、ギブスコア県の Tolosa（トロサ）付近によくみられるバスク姓で、「暗い」を意味する（Gorrotxategi 2023, 17）。語源ははっきりしないが、Goikoetxea（2006, 60）によれば，zezen（「牡牛」の意）と izei（「もみの木」の意）の複合語の可能性が高い。バスク語正書法でも郡名と同じく ezeiza と表記する。現在の地名は、1885 年にこの付近に鉄道が敷設された際に、同氏の息女が当時すでに故人となっていた同氏の姓を駅名とすることを条件に土地を譲渡したことによる²²⁾。エセイサ駅を中心にこの地域が発展し、郡新設時に個人のバスク姓が郡名に与えられた。

⑤ Zárate（サラテ）

サラテは大ブエノスアイレス都市圏の北端に位置し、パラナ川に接する。サラテは 1856 年に設置された古い郡で、郡名は、軍人 Gonzalo de Zárate（ゴンサロ・デ・サラテ）が 1689 年から 1693 年にかけて現在のこと付近の約 5500 ヘクタールの土地を取得して開発したエスタンシアの呼称に由来している²³⁾。この付近に 1827 年頃に Rincon de Zárate（「サラテの土地」の意）と呼ばれる市街地が造成され、それを中心として 1856 年にサラテ郡が創設された²⁴⁾。

サラテは、バスク州アラバ県の基礎自治体 Zuia（スイア）に含まれる地区の名称であることから、バスク地方の地名由来でもあるといえるが、バスク地方の同地区付近の北に接するビスカヤ領主国を起源とする有力家の姓でもある（Salazar 1916, 244）。この姓はバスク地方各地でみられる。バスク語正書法では Zarate とアクセントなしで表記され、zara は「森」、ate は「通路」や「扉」を意味することから、「森への道」を意味する複合語である。

これら 5 つの郡の名称の由来は、Avellaneda や Zárate のように地名として用いられているものもあるが、すべてバスク姓にある。そのうち、国家的偉人の姓が 2 郡、土地を提供した地元有力者の姓が 3 郡に与えられている。地域の開発や国家の発展に功績のあった人物の姓を地名とするのは、アルゼンチンをはじめとするラテンアメリカ諸国でよくある地名命名法であるが、ローカルな人物の姓が地名に用いられているのが印象的である。これは、バスク人の移住の歴史や子孫の国内での活躍の歴史がバスク姓として彼らの間で受け継がれていることの反映である。別の観点からすれば、バスク地方を起源とする多数の住民が大ブエノスアイレス都市圏に居住していることのあらわれでもある。

5.2. 地区名にみるバスク語地名

大ブエノスアイレス都市圏の41の第2級行政区画（ブエノスアイレス市とブエノスアイレス州内の40郡）は、総数488の地区（localidad）により構成される。以下、バスク語地名をともなう地区を含む第2級行政区画を列挙し、図11に示したバスク語地区名とその由来を解説する。本文中では、郡名の後に郡内全地区に占める該当地区数を示す。地区名の冒頭に通し番号を付す。なお地区のポリゴンデータが存在しないため、公共事業省のポイントデータを用いて図11を作成した。

Almirante Brown（アルミランテ・ブラウン郡）（1/13 地区）

① Burzaco（ブルサコ）

ブルサコ地区の地名は、人物のバスク姓に由来する。この地区付近に鉄道が延伸した1865年に駅建設のため複数の土地所有者が所有地を提供したが、その中の一人 Francisco y Eugenio Burzaco（フランシスコ・イ・エウヘニオ・ブルサコ）にちなんで駅がブルスコ駅と命名された。彼の父が現在のバスク州ビスカヤ県ビルバオ近くの San Salvador del Valle（サン・サルバドール・デル・バジェ）出身のバスク人 Ramón Burzaco（ラモン・ブルサコ）であった²⁵⁾。バスク語正書法に従えば、表記は Burtzako となる。この姓がケルト起源の地名に由来するとする説もあるが、はっきりしない。バスク州ビスカヤ県の基礎自治体 Barakaldo（バラカルド）付近に多いバスク姓である。

Avellaneda（アベジャネダ郡）（1/9 地区）

② Avellaneda（アベジャネダ）

詳細は郡名を参照のこと。同地区は郡の中心地区である。

Berazategui（ベラサテギ郡）（2/26 地区）

③ Berazategui（ベラサテギ）

詳細は郡名を参照のこと。同地区は郡の中心地区である。

④ Berazategui Oeste（ベラサテギ・オエステ）

後半の Oeste（オエステ）はスペイン語で「西」を意味する形容詞である。

Brandsen（ブランドセン郡）（1/22 郡）

⑤ Oliden（オリデン）

同地区の地名の由来ははっきりしない。この地区に鉄道が施設され1914年にオリデン駅が開設された頃から使われている地名のようであるが、同駅は1977年に閉鎖されている。Oliden（オリデン）はバスク州ギプスコア県の Deba（デバ）や Azpeitia（アスペイティア）付近に多いバスク姓である。意味はオリーブに関連するともいわれるが、定かではない。この姓が同地区名に与えられた根拠は不明である。

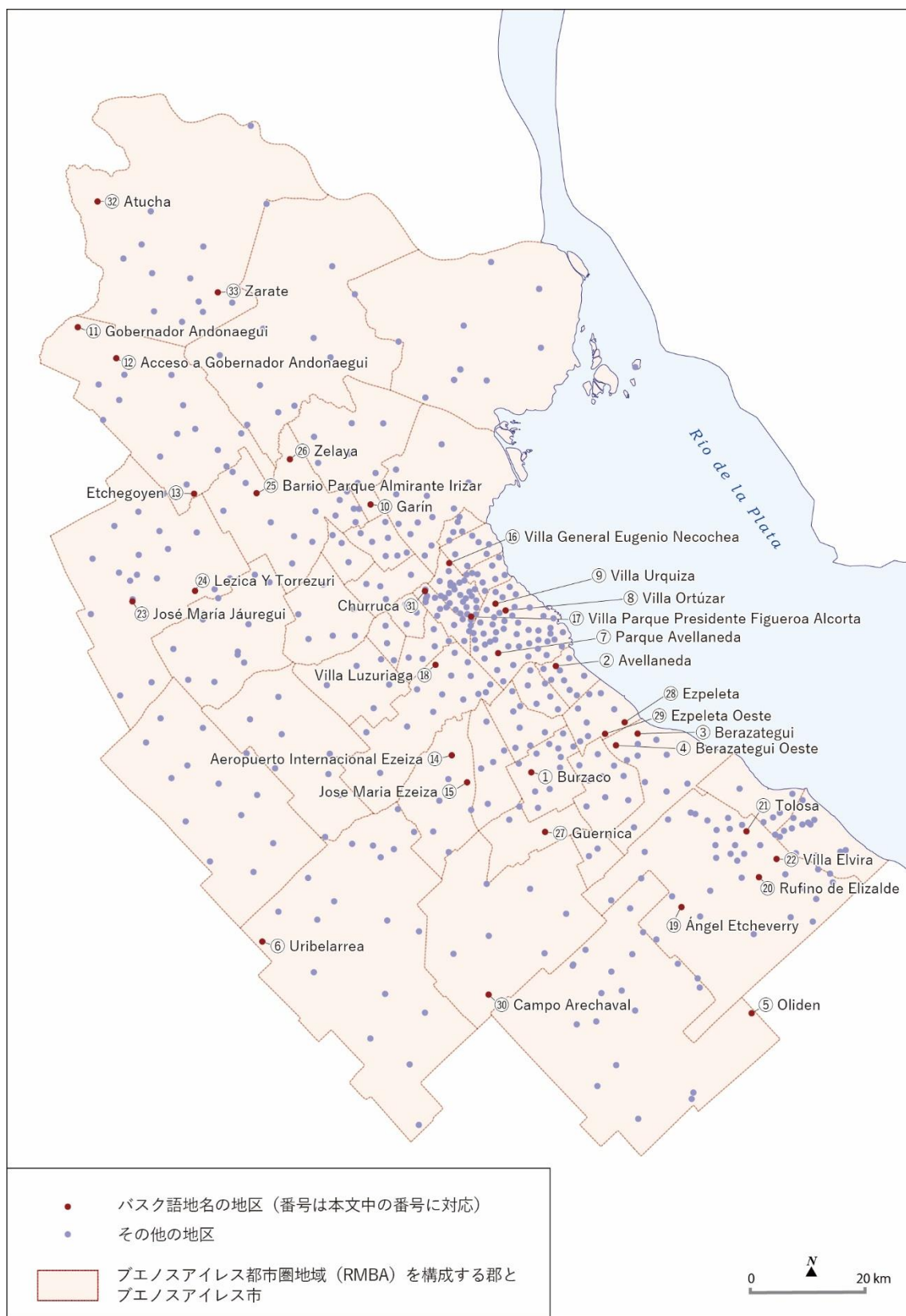


図 11 バスク語地名の地区

注) 地区の名称と位置情報は公共事業省のデータベースによる。

Cañuelas (カニユエラス郡) (1/19 地区)

⑥ Uribelarrea (ウリベラレア)

同地区の地名は、1890 年にエスタンシアの一部を提供した土地所有者 Miguel Nemesio de Uribelarrea (ミゲル・ネメシオ・デ・ウリベラレア: 1833-1905) にちなんでいる²⁶⁾。同姓はバスク州ビスカヤ県アラソラ (Arrazola) を起源とするバスク姓で、接頭辞の ur は「川」、あるいは uri-とした場合は「村」、中間の -belar- は「前の」、語尾の larrea は「牧場」を意味するか女性の名前として用いられるが、地名全体の意味は諸説ある。

La Ciudad Autónoma de Buenos Aires (ブエノスアイレス市) (3/48 地区)

⑦ Parque Avellaneda (パルケ・アベジャネダ)

Avellaneda の詳細は同郡名を参照のこと。第 9 コミューン内の地区で、Parque はスペイン語で「公園」を意味し、全体で「アベジャネダ公園」となる。この地区には元大統領の名を冠した広大な公園 Parque “Presidente Dr. Nicolás Avellaneda” が立地する。この公園は 1914 年 3 月の開設当初、かつての土地所有者にちなんでオリベラ公園 (Parque Olivera: 「オリベラ」はスペイン語姓) と呼ばれていたが、同年 11 月に大統領の功績をたたえ改称された。地区名はこの公園名にちなんで与えられた²⁷⁾。

⑧ Villa Ortúzar (ビジャ・オルトゥサル)

同地区は第 15 コミューンに位置する。Villa は「小地区」や「村」を意味するスペイン語で、Ortúzar がバスク由来の姓である。この地名は、1888 年に開校した学校の用地を市に提供した Santiago Francisco de Ortúzar y Mendiola (サンティアゴ・フランシスコ・デ・オルトゥサル・イ・メンディオラ) をたたえて彼の父姓の Ortúzar がこの付近の街区名に与えられ、それが地区名になった²⁸⁾。彼は現在のバスク州ビスカヤ県 Ermua (エルムア) 出身のバスク人で、母姓の Mendiola もバスク姓である。バスク語正書法では Ortuzar となるが、ortu は「(果樹園を含む) 畑」、-zar は「古い」、全体で「古い畑」を意味し、ビスカヤ県に多い姓とされる。ちなみに母姓の Mendiola は、mendi が「山」、ola が「鍛冶屋」を意味し、ビスカヤ県からギプスコア県に多い姓である。

⑨ Villa Urquiza (ビジャ・ウルキサ)

同地区は第 12 コミューンに位置する。Urquiza はバスク姓である。海岸に近いこの地区にはかつてラス・カタリナス (Las Catalinas) 造船所が立地していたため、1887 年の地区設立当初は Villa Catalinas (ビジャ・カタリナス) と命名されたが、フスト・ホセ・デ・ウルキサ (Justo José de Urquiza: 1801-1870) 大統領 (任期 1854-1856) をたたえるため 1901 年に現在の地区名に改名された²⁹⁾。Urquiza はバスク語正書法では Urkitza と表記し、urki は「白樺」、-tza は集団を表すためにバスク語でよく用いられる接尾辞であり、全体で「白樺の森」を意味する。

Escobar (エスコバル郡) (1/8 地区)

⑩ Garín

大ブエノスアイレス都市圏北部に位置するエスコバル郡に位置する同地区は、その地名の由来を、この付近のかつての土地所有者であるガリン家に持つ。18 世紀頃、現在のバスク州ギプスコア県出身の José Antonio Garín (ホセ・アントニオ・ガリン 1717-1778) がこの付近にエスタンシアを開拓し、

その土地がガリン家に代々受け継がれた³⁰⁾。鉄道の延伸にともない鉄道と駅建設のために土地が譲渡され、そこに 1892 年にガリン駅が開設され、後に地区名になった。

バスク姓 Garín はバスク語正書法で Garin と表記する。もともとは男性の名前 Garindo の短縮形 Garin が姓に転じたものである。gari は「小麦」を意味する。

Exaltación de la Cruz (エスアルタシオン・デ・ラ・クルス郡) (3/16 地区)

⑪ Gobernador Andonaegui

地区名は、リオ・デ・ラ・プラタ副王領時代のブエノスアイレス知事 José de Andonaegui y Zaldua (ホセ・デ・アンドナエギ: 1685-1761, 知事在位期間: 1745-1756) にちなんでいる。Gobernador は知事を意味する職位で、それに父姓 Andonaegui をともない地区名になっている。母姓の Zaldua とともにバスク姓であり、現在のバスク州ビスカヤ県マルキナ・シェメン (Markina-Xemein) の生まれで、当時のビスカヤ領主国の領主も務めた。バスク語正書法では Andonaegi と表記する。Andona には諸説あり、バスク語アカデミーのデータベースによれば「切り株」を意味するとする³¹⁾。語尾の -egi は場所や家を意味する接尾辞である。したがって Andonaegi は「切り株の場所」を意味する。同地区には、鉄道の延伸にともない同名の駅が 1912 年に開業したが、1977 に閉鎖された。植民地時代にこの付近であった先住民の反乱を平定した知事の名にちなんで駅が命名され、駅名が地区名のもとになった³²⁾。

⑫ Acceso a Gobernador Andonaegui (アクセソ・ア・ゴベルナドール・アンドナエギ)

上記地区名参照のこと。冒頭の“Acceso a ...”は「...への通路」を意味するスペイン語。

⑬ Etchegoyen (エチェゴジェン)

この地名の由来は不明である。記録には、この地区には 1998 年に閉鎖されたエチェゴジェン駅の廃駅が存在するが、その駅名の由来も定かでない。この付近にナバラ出身のバスク人 Ángel León Vélaz (アンヘル・レオン・ベラス) が 1860 年代末に入植し、エスタンシアを開拓した後に駅近くにベラス商店を開業して成功したが、1879 の死去後、夫人が子供をともなって故郷に戻り、後にブエノスアイレスに戻ったとの記録がある (Echarri 2013)。しかし同じ記録にエチェゴジェン姓が登場せず、ベラス家とエチェゴジェン姓の関係が不明である。

現在の地区名はフランス側の北バスクの姓にみられ、バスク語正書法では Etxegoien と表記される。Etxe は「家」、goien は「さらに上」を意味するので、全体で「さらに上の家」の意である。

Ezeiza (エセイサ郡) (2/7 地区)

⑭ Aeropuerto Internacional Ezeiza (アエロプエルト・インテルナシオナル・エセイサ)

Ezeiza は同じ郡名を参照のこと。Aeropuerto Internacional は「国際空港」を意味するスペイン語。

⑮ Jose Maria Ezeiza (ホセ・マリア・エセイサ)

Ezeiza は上に同じ。地区名全体で個人の姓名になる。ホセ・マリア・エセイサはこの付近のかつての土地所有者である。

General San Martín (ヘネラル・サン・マルティン郡) (2/24 地区)

⑯ Villa General Eugenio Necochea (ビジャ・ヘネラル・エウヘニオ・ネコチェア)

地区名は、南アメリカ諸国の独立に貢献した軍人で、後にチリで政治家としても活躍した Eugenio Necochea Zaraza（エウヘニオ・ネコチェア・サラサ）に由来する。父姓の Necochea がバスク姓で、バスク語正書法で Nekotxea と表記し、neko は eneko の短縮形で、ナバラ州を中心とするバスク地方全域に多い男性の名前 Iñigo（イニゴ）、あるいは「私のかわいい男の子」（ene が「私の（もの）」、「ko」は男子の愛称）を意味し、-txea は etxea の短縮形で「家」を意味する。「イニゴの家」または男子の子供の分家に使われる住宅地名である。

同地区にはエウヘニオ・ネコチェア駅がある。地区名と駅名のどちらが先行したかは確認できない。

⑰ Villa Parque Presidente Figueroa Alcorta（ビジャ・パルケ・プレシデンテ・フィゲロア・アルコルタ）

地区名は、スペイン語普通名詞（Villa「集落」・Parque「公園」、職位 Presidente（大統領：在位 1906-1910）と個人名により構成される。José Figueroa Alcorta（ホセ・フィゲロア・アルコルタ）の父姓 Figueroa はイタリア姓であるが、母姓 Alcorta がバスク姓で、バスク正書法では Alkorta と表記する。al は(h)arri の変化形で「石」を、korta は「小屋」あるいは「厩舎」を意味し、全体で「石造りの小屋」を意味する。

La Matanza（ラ・マタンサ郡）（1/15 地区）

⑱ Villa Luzuriaga（ビジャ・ルスリアガ）

地区名は、スペイン語の Villa「集落」と、バスク姓 Luzuriaga で構成される。命名の根拠は定かでないが、同地区が別名 Villa General Luzuriaga と呼ばれていることから、アルゼンチン独立戦争で功績のあった軍人 Toribio de Luzuriaga y Mejía（トリビオ・デ・ルスリアガ・イ・メヒア）の父姓に由来していると推測される。Luzuriaga はバスク正書法そのままの表記で、lur/lu-は「土地」、zuri は「白い」、-aga は場所を表す接尾辞で、全体で「白い土地の場所」の意となる。バスク州アラバ県東部の Donemiliaga（ドネミリアガ）を中心にバスク州からナバラ州に広くみられる姓である。

La Plata（ラ・プラタ郡）（5/35 地区）

⑲ Ángel Etcheverry（アンヘル・エチェベリー）

同地区の設置は 1910 年であるが、地名は鉄道と関連する。当時の公共事業大臣アンヘル・エチェベリーの尽力でラ・プラタの港湾地区とブエノスアイレス州の内陸を結ぶ鉄道が施設され、彼の名を冠したアンヘル・エチェベリー駅が 1910 年に開設され、その直後に駅名を冠した地区が設置された³³⁾。

名前の Ángel は「天使」を意味するスペイン語であるが、個人名としても用いられることもある。姓の Etcheverry がバスク姓で、フランス側の北バスクでよくみられる Etxeberria（新しい家）の変化形である。

⑳ Rufino de Elizalde（ルフィノ・デ・エリサルデ）

地区名は、外務大臣や財務大臣を歴任した政治家 Rufino de Elizalde（ルフィノ・デ・エリサルデ：1822-1887）に由来する。彼は外務大臣就任前の一時期、鉄道会社の代表を務めていたが、彼の死後 1890 年に開設された駅が彼の功績をちなんでルフィノ・デ・エリサルデ駅と命名された³⁴⁾。この駅名が後に地区名に転じている。

父姓の Elizarde がバスク姓で, eliza は「教会」, -alde が場所の接尾辞「～の一部, 横」を意味することから, 全体で「教会の横」を意味する。

②① Tolosa (トロサ)

同地区は, 1871 年にこの付近に鉄道が延伸した際に土地所有者の Martín José Iraola (マルティン・ホセ・イラオラ) が創設した地区である。鉄道開設時に創設される地区は, 土地の提供者の姓が与えられるのが一般的であるが, 彼は祖父母の出身地である現在のバスク地方ギプスコア県の都市 Tolosa (トロサ) の地名を新地区に命名した³⁵⁾。

Tolosa はバスク地方の地名であるが, その由来は 1256 年にアルフォンソ 10 世が現在のトロサの前身の都市を創設した際に, 当時反映していたピレネー山脈北側フランク王国の都市名 Toulouse (トゥールーズ) の名前を与えたことにある³⁶⁾。Toulouse は言語学的にはオック語由来なのでトロサも言語学的由来は同じといえるが, 中世から根付いているバスクの地名なので, ここではバスク地名として扱う。

②② Villa Elvira (ビジャ・エルビジャ)

地区名の Elvira は, 土地所有者の夫人 Elvira de Sotés (エルビラ・デ・ソテス) の名前に由来する。彼女は 1866 年に現在のバスク州ビスカヤ県 Bilbao (ビルバオ) に生まれたバスク人で, 1877 年にブエノスアイレスに移住した³⁷⁾。彼女は実業家 Samuel Ponsati (サムエル・ボンサティ) と結婚したが, Ponsati はカタルーニャ地方由来の姓である。この実業家が同地区付近に開発した分譲地に夫人の名前を与えたのが, 地区名の由来である。Elvira はバスク地方でよくみられる女性の名前であるが, スペイン各地でもみられる。バスク語正書法では Elbire と表記する。地名に人物の姓ではなく名が与えられるのはまれなケースである。

Luján (ルハン郡) (2/21 郡)

②③ José María Jáuregui (ホセ・マリア・ハウレギ)

同地区名は, 実業家 José María Jáuregui (ホセ・マリア・ハウレギ) に由来する。彼が 1884 年に鉄道建設と駅建設のために所有地を提供しことで, 駅はハウレギ駅と命名され, 地区名にも彼の名が与えられた³⁸⁾。彼の名前 José María はスペイン語名であるが, Jáuregui はバスク姓で, バスク語正書法では Jauregi と表記し, 「宮殿」を意味する。Jauregi は南バスク各地の地名にもみられる。

②④ Lezica y Torrezuri (レシカ・イ・トレスリ)

同地区名は, 植民地時代のブエノスアイレス市長 Juan de Lezica y Torrezuri (ファン・デ・レシカ・イ・トレスリ: 1709-1784) に由来する。彼は現在のバスク州ビスカヤ県のコルテスビ (Kortezubi) 出身のバスク人で, ビスカヤ領主国の貴族の家系に属し, Lezica は父姓, Torrezuri が母姓である。Lezica はバスク語正書法では Lezika と表記され, Salaberri (2011, 164) は Lezika (Lezica) がコルテスビの住居地名であるとしている。Torrezuri は torre (dorre と表記する場合もある) が「塔」, zuri が「橋」を意味する。

Pilar (ピラール郡) (2/17 地区)

②⑤ Barrio Parque Almirante Irizar (バリオ・パルケ・アルミランテ・イリサール)

同地区名は、1903 年に南極で遭難したスウェーデン船乗組員の救助で活躍した元海軍中将 Julián Irizar Echeverría (フリアン・イリサール・エチェベリア: 1869-1935) に由来する。父姓 Irizar と母姓 Echeverría とともにバスク姓で、Irizar の iri は「村、集落」、-zar は「古い」を意味し、「古い村」の意である。既出の Echeverría は「新しい家」の家である。

彼の姓が地区名に付された経緯は不明である。

②⑥ Zelaya (セラヤ)

同地区名は、1806 年のイギリス軍によるブエノスアイレス侵攻に対する抗戦やその後の独立戦争で功績をあげた軍人 Cornelio Zelaya (コルネリオ・セラヤ: 1782-1855) に由来する。Zelaya はバスク姓で、バスク正書法では Zelaia と表記し、zelai が「畑」や「平地」を意味し、それに -a の冠詞が付く。

郡の中心地ピラルから離れたこの付近には、19 世紀ごろまで多くのエスタンシアが立地した。そこに 1892 年に鉄道が施設されコペジョ (Copello) 駅が開設されたが、数年後に軍人の功績にちなんでセラヤ大佐駅 (Coronel Zelaya)、1905 年にセラヤ駅 (1995 年に廃駅) と改名された。20 世紀中ごろ駅周辺に市街が形成され、現在の地名のセラヤ地区と呼ばれるようになった³⁹⁾。

Presidente Perón (プレジデンテ・ペロン) 郡 (1/3 郡)

②⑦ Guernica (ゲルニカ)

同地区名は、現在のバスク州ビスカヤ県のゲルニカ (Guernica はスペイン語表記で、バスク語正書法で Gernika) の地名に由来する。ある。姓由来が多い大ブエノスアイレス都市圏のバスク地名において、トロサとともに数少ない地名由来である。地名の命名者は、この地域のエスタンシアの所有者で起業家でもあった Matilde Díaz Vélez (マチルデ・ディアス・ベレス: 1899-1986) である。彼女は 1934 年に父から相続した土地に Guernica という都市を設立する計画をブエノスアイレス州公共事業省に提案し、翌年それが承認された。そこに鉄道が敷設されて 1940 年に建設された駅は当初ロペス・カメロ (Lopez Camelo) 駅と命名されたが、彼女がそれに反対し 1948 年にゲルニカ駅に改名された。改名の理由として彼女は、「バスクの自由と一族の祖国 (patria) の誇りとつながる象徴的な名前をこの国 (アルゼンチン) に与えることを願って」と説明している⁴⁰⁾。彼女の一方の姓 Vélez はバスク地方でも見られるバスク姓であるが、スペイン国内各地で見られる姓でもある。彼女が都市ゲルニカ建設を提案した 1934 年は、バスク地方のゲルニカが空爆されピカソが壁画を作成する 1937 年の 3 年前であることから、ゲルニカの事情に詳しいバスク地方出身の可能性はあるが、それだけでは先祖がバスク出身であることは証明できない。そもそも彼女の言う「祖国」がバスク地方なのかスペインなのか不明である。

Quilmes (キルメス郡) (2/9 地区)

②⑧ Ezpeleta (エスペレタ)

同地区名は、バスク人の商人 Salvador Joaquín Ezpeleta (サルバドル・ホアキン・エスペレタ: 1766-1835) に由来する。彼は現在のバスク州ギプスコア県北部の Oiartzun (オイアルツン) 出身で、アルゼンチン北部のエントレ・リオス (Entre Ríos) 州の発展に貢献した。その息子 Mariano (マリ

アノ)がこの地区付近にエスタンシアを開発し、鉄道延伸でその土地に開設された駅が Teniente Coronel Severo Ezpeleta (セベロ・エスペレタ中佐 [彼がマリアノと血縁関係があるかどうかは不明]) 駅と命名され、1891年の都市区画整理で現在の地区名が決定された⁴¹⁾。Ezpelaza はバスク由来の姓でありかつ地名でもあり、バスク語正書法でも表記は同じである。espel は「ツゲの木」を意味し、語尾の-eta は複数形を意味する語尾である。したがって「ツゲの森」を意味する。

②9 Ezpeleta Oeste

上に同じ。Oeste はスペイン語で「西」を意味する。市街地の拡張により独立した地区として新設された。

San Vicente (サン・ビセンテ郡) (1/7 地区)

③0 Campo Arechaval

同地区名の由来ははっきりしない。同地区はブエノスアイレス都市圏南西端に位置し、サン・ビセンテの市街地から離れた農村地域である。Campo はスペイン語で牧場や畑を意味し、アルゼンチンの場合はエスタンシアに充てられるので、通常なら「アレチャバル家のエスタンシア」を意味するのであるが、この付近に同名のエスタンシアは存在しない。

Arechaval はバスク姓で、バスク語正書法では Aretxabal と表記する。areitz/aretx は「オークの木」を、-zabal は「広い」を意味し、全体で「広いオーク (の森)」となる。

Tres de Febrero (トレス・デ・フェブレロ郡) (1/15 地区)

③1 Churruca

同地区名の由来ははっきりしない。同地区は 1970 年に設置された比較的新しい地区ではあるが、命名の記録を見つけないことができない。近隣に 1930 年代に警察病院として開業したバルトロメ・チュルカ病院が立地し、その名称が用地の寄贈者の父親 Bartolomé Churruca のバスク姓に由来し、この付近の地区に「チュルカ」と命名された街路や公園が複数存在することは把握できているのであるが、それが地区名と関係するかまでは確認できない。

バスク語正書法では Txurruka と表記し、バスク姓や地名として使われる。語頭は zurrut あるいは xurrut から派生した水の湧き出る音を表現する名詞で、語尾の-ka は定冠詞である。この家屋名を持つ荘宅がバスク州ギプスコア県中部の Placencia (プラセンシア) や Azkoitia (アスコイティア) にみられるので、姓は家屋名から派生したと考えられている。

Zárate (サラテ郡) (2/14 地区)

③2 Atucha

地区名は、この付近の土地を所有していた José Atucha (ホセ・アトゥチャ) に由来する。彼は自身のエスタンシア Rincón de Atucha (リンコン・デ・アトゥチャ) に住みつつ複数のエスタンシアを経営した。その付近に鉄道が延伸した 1880 年代に複数の分譲地を開発して自身の姓 Atucha や妻の姓 Lima (リマ) をそれらに与えたが、その 1 つがアトゥチャ地区であった⁴²⁾。彼の妻の姓を地名の由来とする隣接地区リマには、アトゥチャ原子力発電所が立地する。

③3 Zárate (サラテ)

詳細は郡名を参照のこと。同地区は郡の中心地区である。

以上の33地区がバスク語を含む地名を持つ。全488地区の6.8%に相当する。33地区以外にも、バスク語由来の可能性がある地名を持つ地区が7つ存在したが、バスク姓やバスク地名を由来とすることが確認できなかったので今回は省いた⁴³⁾。

第2級行政区画のバスク語地名はすべてバスク姓由来であったが、地区レベルの地名もバスク姓由来が多い。しかしその形態は多様である。バスク姓を含む地区名は30地区あるが、そのうち個人を特定できるバスク姓を含む地区名は26、個人を特定できないがバスク姓だとわかる地区名は4つある。また、バスク姓を含む30地区のうち名前まで含むものが5地区ある⁴⁴⁾。アルゼンチンの地名は人名由来地名が多いことから、バスク語地名も人名由来が多いとは予想していたが、そのとおりの結果になった。個人の姓名を由来とする26地区のうち、歴史的偉人の姓名を冠するのが13地区であるのに対し、鉄道駅の開設にともない所有地を提供した地元有力者の姓名が与えられたのが13地区である。

6. おわりに

地名は場所を識別するために用いられる固有名詞である。人物を識別するための固有名詞である姓名と基本的に役割が同じであり、人名が地名に転用される現象はそれぞれの機能を考えれば当然起こりうる。ラテンアメリカ諸国の場合、国民の国家への帰属意識を醸成する役割を地名に込める傾向が強いため、国家的偉人の姓名が地名に転用される場合が多い。本研究開始当初は国家的偉人の姓名を転用するケースが多いことを予想していたが、ローカルな次元の地元有力者の姓名が地名に含まれるケースが国家的偉人とほぼ同じ割合で存在することは予想外であった。ブエノスアイレスの人々が、地元の歴史を地名に記録して継承するという地名の役割を尊重し、生活の舞台とするローカルな地域に対する愛情を地名に込めていることが理解できた。

バスク語地名には、バスク人の移住の歴史や、移住先のブエノスアイレスでの歴史が込められている。今回の調査で印象的だったのが、現在の地名の由来になったバスク人の個人に行き当たるだけでなく、その祖先の植民地期のバスク人移住者や、さらには移住前のバスク地方の出身地あるいは出身家までさかのぼることのできるケースが多々あることである。そうした点で、バスク地方の地名由来のGuernicaとTolosaという地区名は特筆に値する。ブエノスアイレスのバスク語地名の大部分がバスク姓に由来するが、バスク姓はほとんどが住居地名由来でありそれがバスク地方の地名にも転化されていることを考えれば、今回抽出したバスク語地名のほとんどがバスク地方の地名由来ともいえるのであるが、厳密に地名を転置したのはこの2ケースのみである。Tolosaのケースは先祖の出身地を地名に刻むという個人的な理由であるが、Guernicaの場合は、命名理由を解釈すればバスク人が共有する記憶を地名に刻むという集合的記憶としての地名の役割に注目したものであった。

本研究の本来の目的は、バスク地方のバスク文化の再生と並行してブエノスアイレスにおいてもバスク語地名を本来のバスク語表記に戻す動きがあるかを検証することにあった。バスク地方の行政地名は、石井（2010, 2011, 2013）が明らかにしてきたように、バスク語正書法の表記へ改名されてきた。しかしブエノスアイレスにおいては、バスクディアスポラにおける強固なバスク人ネットワークが存在するにもかかわらず、予想に反して観察することができなかった。このことは、地名は誰のものか、地名標準化の基準はどこにあるのかなど、田邊（2020）が提起する命題に関連する。バスク地

方の行政地名の改名は、石井（2013）で解説したようにバスク州やナバラ州の州法に則り自治体や住民による発議からはじめられ、州政府議会の承認で決定される。アルゼンチンの場合も基本的に同じで、自治体組織法（1958 年 6769 号法）に定めた手続きに則り、自治体あるいは住民の発議により開始され、住民投票と州議会の承認により決定される。バスク地方のように住民のバスク語話者共同体への帰属意識が強く、地名標準化の過程にバスク語アカデミーのような学術機関が関与する場合、改名手続きにおいてバスク語正書法は尊重され、正書法に準拠した地名に改名される。しかし大ブエノスアイレス都市圏の場合、全住民がバスク語話者共同体への帰属意識を共有するわけではなく、そうした環境下における地名改名ではバスク語正書法のように特定でかつ少数派の共同体の価値基準は尊重されない。こうしたローカルな地名の場合、場所に主体的にかかわる地域住民が命名や改名の主体になるのが自然な姿であることを考えれば、当然の帰結であろう。

しかし今回の現地調査では、民間の施設にバスク語正書法の施設名をいくつか見つけ、当事者に聞き取り調査を実施することができた。個人所有の施設や不動産であれば、個人の帰属する共同体の価値観を名称に反映することができる。こうした動向を今後取りまとめ、成果を発表していきたい。

謝辞

本稿執筆に際し、アルゼンチン国土地理院（Instituto Geográfico Nacional: IGN）、同センサス局（Instituto Nacional de Estadística y Censos de la República Argentina: INDEC）、現地バスクセンターの関係者、バスク地方のバスク語アカデミー（Euskaltzaindia）の研究者らから貴重な資料とご意見の提供を賜った。ここに記して御礼申し上げます。

注

- ¹⁾ 日本政府や国連が公表する国土面積は 278 万 400 平方キロメートルであるが、それより大きいのは、アルゼンチン政府が領有を主張するアルゼンチン南極領のほか、イギリスとの領有問題をかかえる大西洋上のマルビナス諸島（イギリス名フォークランド諸島）とサウスジョージア・サウスサンドウィッチ諸島、チリとの領有問題をかかえる南パタゴニア氷原など、アルゼンチンが主張する領域を国土面積に含めているためである。
- ²⁾ 14 の郡は当時の名称で次の通り；Avellaneda, 4 de Junio, Lomas de Zamora, Matanza, San Martín, Vicente López, San Isidro, San Fernando, Las Conchas, Florencio Varela, Quilmes, Esteban Echeverría, Morón, General Sarmiento.
- ³⁾ 法的に定義されたブエノスアイレス広域都市圏については Downes（2010）に詳しい。それによれば、最初の改正は 1979 年州法 760 号で、5 つの郡（Almirante Brown, Florencio Varela, Merlo, Moreno, Tres de Febrero）が加えられた。1989 年の州法 10806 号では郡の数に変化はなかったが、隣接のラ・プラタ都市圏が設定され、それに含まれる郡がブエノスアイレス広域都市圏から省かれた。1992 年州法 1124 号では、新たに 4 つの郡（Berisso, Ensenada, La Plata, Sanvicente）が加えられた。1994 年州法 11746 号では、既存のバルディドから 7 つの新バルディドが分離独立し、29 の郡とブエノスアイレス市により構成されるようになった。現行の定義は 2006 年州法 13473 号による。
- ⁴⁾ 当時の大ブエノスアイレスは、ブエノスアイレス市と、7 つの郡の全域（Avellaneda, Lomas de Zamora, Morón, San Martín, Vicente López, San Isidro, San Fernando）と 4 つの郡の一部（Almirante Brown, Matanza, Quilmes, Tigre）で構成された。推計人口は 349 万 8 千であった（INDEC 2024, 8）。
- ⁵⁾ センサス局は、当初の都市圏地域をブエノスアイレス市とその周囲の 24 の郡としていたが、その後に公表した調査結果で 31 郡に拡大した（INDEC2024, 8）。
- ⁶⁾ 同じ用語がブエノスアイレス州の首都圏広域都市計画において 1970 年以降用いられている。都市計画分野、特に通勤圏との関連で鉄道網や道路網を計画する際に用いられる地域概念である（Marco and Buzai 2022, 657）。
- ⁷⁾ 面積と人口は、バスク州統計局 Eustat（2023）、ナバラ州統計局 Nastat（2023）、バスク地方都市圏共同体 La Communauté Pays Basque（2024）公表の数値を合算した値である。

- 8) 「家系名」(バスク語の *deitura*) は、英語の *surname* や *family name* に対応し、日本語の家族集団名「名字」や血族集団名「姓」とは本来の意味が異なるため厳密には使い分けるべきなのだが、今日ではすべてほぼ同義に使われているため、本研究では以下「姓」の用語をこれに充てる。
- 9) 広義には地名と解釈できる住居地名が姓として機能するのはバスク語文化圏の特徴で、姓と住居地名あるいは地名の関係は López-Mugartza (2018) や Matxikote (2023) に代表されるように、現地研究者が関心を寄せる研究テーマになっている。
- 10) Gorrotxategi (2023, 7) は、1704 年のビスカヤ領主国の古文書 *Fogueración* を調査し、アモロト村 (Amoroto) の住民 99 人のうち 95 人が住居地名姓を持ち、4 人が父姓と住居地名の混合姓であること、セアヌリ村 (Zeanuri) 住民 350 人のうち、344 人が住居地名姓、6 人が混合姓 (1 人が父姓と住居地名、5 人が人名と住居地名) であったと報告している。
- 11) ニューファウンドランドやセントローレンス湾付近はバスク人漁師が名付けたバスク語地名の痕跡が多いため、Egaña (1992) に代表される仏語化あるいは英語化した地名からバスク語地名を探る研究も存在する。
- 12) シモン・ボリバル Simón Bolívar の正式な氏名は Simón José Antonio de la Santísima Trinidad Bolívar Palacios Ponte y Blanco である。Simón が名、José Antonio de la Santísima Trinidad が洗礼名や先祖の名前で構成されるミドルネーム、Bolívar が第 1 姓 (父方の姓)、Palacios が第 2 姓 (母方の姓) Ponte y Blanco は Ponte が父の母親の姓、Blanco が母の父親の姓である。スペイン語圏では、シモン・ボリバルのような貴族以上の階級は古くから姓を持ち、父方の姓を第 1 姓として母方の姓を第 2 姓とし、その親の姓も引き継いだ。どの盛大で区切るかは地域や時代により異なるが、個人的に代々姓を重ねる人々もいた。バスク人の場合、すべての姓がバスク姓であることが生粋のバスク人の証拠ともいわれる。ちなみにシモン・ボリバルの場合、バスク姓は第 1 姓の Bolívar のみである。
- 13) 前述のザビエルが「新しい家」を意味する Etxeberria の変種であるように、この地名の変種は 20 以上存在する。主なものを列挙すると次の通り: Chávarri, Chavarria, Cheberri, Cheberry, Chiberri, Echavarria, Echebarria, Echeberre, Echevarría, Echeverri, Echeverría, Echeberria, Etxeberri, Etxeberria, Etxeberri, Etxeberria, Etxeberrieta, Etxebarrieta, Hechavarria, Etxeber, Echeber, Etxeberre, Hechavarria, Iberri, Txiberri, Xavier, Xabier
- 14) そもそもバスク語は、スペイン語や仏語が行政や文学作品の筆記言語として用いられていたのに対し、長い間市民の話言葉であり、筆記言語になる機会がなかった。そのため地域間の方言差が激しく、Batua と呼ばれる統一バスク語がバスク語アカデミーにより制定されるのが 1970 年代であった。音韻表記などの正書法が確立するのも 19 世紀末であり、Etxeberria という表記はその時代に確定されたものである。こうした事情が標記の多様性に反映されているといえる。
- 15) 詳しくは Euskaltzaindia (2005) 参照のこと。
- 16) EODA: Euskal Onomastikaren Datutegia <https://www.euskaltzaindia.eus/index.php?option=com_ecocoda&task=bilaketaPortada&Itemid=472&lang=eu>.
- 17) 2024 年 3 月の現地調査の際に、バスクセンターの 1 つであるファン・デ・ガライ協会のホルヘ・ベルナルディが、Lanús 郡もバスク語由来であると指摘していた。しかし同年 9 月のバスク地方での現地調査でバスク語アカデミーの地名専門家ミケル・ゴロチャテギに確認したところ、バスク語由来でないとの回答を得た。オック語の変種であるガスコーニュ語由来のようである。そのため Lanús は今回の対象から外している。
- 18) アベジャネダ家は、バスクの家系ではなくスペイン北西部のガリシア出身の家系であるとする説があるが、定かではない。Vilella (2016) もガリシア由来説に疑義を唱え、植民地期の有力家としてアベジャネダ家の系譜を紹介している。Salazar (1916, 415-416) もアベジャネダ家をビスカヤの家系として紹介している。
- 19) アベジャネダ郡公式 HP による (<<https://www.mda.gob.ar/ciudad/avellaneda/>>2024 年 10 月 1 日閲覧)。
- 20) エステバン・エテベリア郡公式 HP による (<<https://www.estebanecheverria.gob.ar/municipio/>> 2024 年 10 月 1 日閲覧)。
- 21) エセイサ郡公式 HP< <https://www.ezeiza.gob.ar/historia.php>> (2024 年 10 月 1 日閲覧) による。
- 22) 同上 HP による。
- 23) サラテ郡公式 HP<https://www.hcdzarate.com.ar/index.php?seccion_generica_id=277> (2024 年 10 月 1 日閲覧) による。
- 24) 同郡は 1932 年から 1946 年の間の一時期、世界恐慌後にクーデターで政権を奪取して独裁政権を敷いたホセ・フェリックス・ウリブル・イ・ウリブル大統領 (José Félix Benito Uriburu y Uriburu: 任期 1930-1932) にちなんで、郡名を General José F. Uriburu (ヘネラル・ホセ・エフェ・ウリブル) と改名した。ウリブル (Uriburu) もバスク姓である。ur-は「頂点」や「先端」、buru は「頭」、全体で「頭のとっぺん」を意味する複合語である。
- 25) アルミランテ・ブラウン郡公式 HP <<https://www.debrown.com.ar/burzaco-una-ciudad-llena-de-sitios-emblematicos-cumple-hoy-159-anos/>> (2024 年 10 月 3 日参照) による。
- 26) カニューエラ郡公式 HP <<https://www.canuelas.gov.ar/index.php/turismo/localidades/item/403-uribelarrea>> (2024 年 10 月 3 日参照) による。

- 27) ブエノスアイレス市公式 HP<<https://buenosaires.gob.ar/laciudad/barrios/parqueavellaneda>> (2024 年 10 月 3 日閲覧) による。
- 28) ブエノスアイレス市公式 HP< <https://buenosaires.gob.ar/laciudad/barrios/villa-ortuzar> > (2024 年 10 月 3 日参照) による。
- 29) ブエノスアイレス市公式 HP< <https://buenosaires.gob.ar/laciudad/barrios/villa-urquiza>> (2024 年 10 月 3 日参照) による。
- 30) エスコバル郡公式 HP< <https://escobar-site.com.ar/turismo/monumentos.htm> > (2024 年 10 月 5 日閲覧) による。
- 31) Mitxelena (1989, 41) は、古代ローマ皇帝アントニヌスに由来するとしているが、「切り株」説のほうが有力である。
- 32) 現地紙 Crónica の HP 記事 “Escapada: el hermoso pueblito con túneles vegetales y una de las pulperías más antiguas de Buenos Aires” (2022 年 8 月 5 日) <<https://www.cronica.com.ar/sociedad/Escapadas-el-pueblito-con-tuneles-vegetales-y-la-pulperia-mas-antigua-de-la-pampa-20220804-0165.html>> (2024 年 10 月 3 日閲覧) による。
- 33) 現地紙 Periódico Sin Límites の記事 “Ángel Etcheverry cumple 114 años y este domingo lo festejará con diversas actividades” (2024 年 4 月 23 日) < <https://periodicosinlimites.com.ar/angel-etcheverry-cumple-114-anos-y-este-domingo-lo-festejara-con-diversas-actividades/>> (2024 年 10 月 4 日閲覧) による。
- 34) 現地紙 Diario El Día de La Plata の記事 “Altos de San Lorenzo: La figura de Rufino de Elizalde, clave en la historia de barriada” (2020 年 11 月 29 日) < <https://www.eldia.com/nota/2020-11-19-6-32-38-altos-de-san-lorenzo-la-figura-de-rufino-de-elizalde-clave-en-la-historia-de-la-barriada-la-ciudad/>> (2024 年 10 月 4 日閲覧) による。
- 35) 現地紙 Diario El Día de La Plata の記事 “Con aporte vecinal, Tolosa revive 150 años de historia” (2023 年 12 月 23 日) < <https://www.eldia.com/nota/2023-12-23-3-19-46-con-aporte-vecinal-tolosa-revive-150-anos-de-historia-la-ciudad/>> (2024 年 10 月 5 日閲覧) による。
- 36) バスク州政府公式 HP “Patrimonio cultural: Casco histórico de Tolosa” <<https://www.euskadi.eus/app/ondarea/patrimonio-construido/casco-historico-de-tolosa/tolosa/-casco-historico/fichaconsulta/57031>> (2024 年 10 月 5 日閲覧) による。
- 37) 現地紙 Diario El Día de La Plata の記事 “Villa Elvira: La curiosa historia de una muy bella joven vasca” (2020 年 11 月 19 日) < <https://www.eldia.com/nota/2020-11-19-6-15-38-villa-elvira-la-curiosa-historia-de-una-muy-bella-joven-vasca-la-ciudad/>> (2024 年 10 月 5 日閲覧) による。
- 38) ルハン州公式 “Luján Rumbo a los 400 Años” <<https://www.lujan.gob.ar/?q=lujan-rumbo-los-400-anos>> (2024 年 10 月 5 日閲覧) による。
- 39) 現地紙 Pilar a Diario の記事 “132° aniversario de la estación Zelaya” (2024 年 4 月 30 日) <<https://www.pilaradiario.com/informacion-general/132-aniversario-la-estacion-zelaya-n5452979>> (2024 年 10 月 5 日閲覧) による。
- 40) プレジデnte・ペロン州公式 HP “Historia del Partido,” <https://www.presidenteperon.gov.ar/municipio_historia.php> (2024 年 10 月 5 日閲覧) による。
- 41) バスク文化協会 Basque Heritage Elkarte HP “La ciudad argentina de Ezpeleta, ligada en su origen a la familia oiartzuarra homónima, cumple su 135 aniversario,” < <https://www.euskalkultura.eus/espanol/noticias/la-ciudad-argentina-de-ezpeleta-ligada-en-su-origen-a-la-familia-oiartzuarra-homonima-cumple-su-135-aniversario> > (2024 年 10 月 6 日閲覧) による。
- 42) ブエノスアイレス市文化遺産継承記録 “Bóveda: Propietario José Atucha (丸天井納骨堂: ホセ・アトゥチャ埋葬)” < <https://buenosaires.gob.ar/areas/cultura/cpphc/masoneria/fichas/BOV9-ATUCHA.pdf>> (2024 年 10 月 6 日参照) による。
- 43) 具体的には Barrio Las Quintas, Club de Campo Larena-Los Quinchos, Francisco Álvarez, Ingeniero Pablo Nogués, Villa Bernardo Monteagudo, Villa Elisa, Villa María Irene de los Remedios de Escalada の 7 地区である。バスク姓 Monteagudo, Las Quintas, Nogués, Álvarez, Larena は、スペイン語圏、ガリシア語圏、カタルーニャ語圏でもよくみられる姓であり、姓の発祥地がはっきりしない。そのため姓だけでは帰属する言語圏が判断できない。個人あるいはその先祖がバスク地方と関係していればリストに含めることができるが、今回確認した個人はすべてバスク地方以外と関係していた。バスク地方でよくみられる女性の名前 Elisa, Irena は他の言語圏でも一般的な名前のうえ、地名の由来となる個人や先祖の出身地がバスク地方と確認できなかったので除外した。
- 44) 第 2 級行政区画の場合、5 郡中 2 郡 (Berasategui, Zarate) が同じケースであるが、まず同名の地区が命名され、そこを中心に市街地が発展して後に郡名が与えられている。

参考文献

- 石井久生 (2013). 「制度により構築される言語景観——バスク州とナバラ州における基礎自治体改名の実践」『共立国際研究』30: 39-61.
- 石井久生 (2011). 「バスク自治州にみるボーダーランドの言語景観——基礎自治体名称バスク語化の事例から」山下清海編『現代のエスニック社会を探る——理論からフィールドへ』学文社, pp. 147-167.
- 石井久生 (2010). 「バスク語地名の復活にみるボーダーランドの多義性とローカル・イニシアティブ」『共立国際研究』27: 1-25.
- 田邊 裕 (2020). 『地名の政治地理学——地名は誰のものか』古今書院.
- Ardissone, Romualdo (1922). Toponimia de la República Argentina. *Humanidades*, 3: 415-448.
- Burgueño Rivero, Jesús (2002). “El mapa escondido: Las lenguas de España,” *Boletín de la A.G.E.*, 34: 171-192.
- Downes, Juan Carlos (2010). *Radiografía del conurbano bonaerense*. Buenos Aires: Dunken. 2010.
- Echarri, Fabio Javier (2013). “Los Vélaz en Argentina: Su contribución al desarrollo productivo y comercial,” Solcialidak, Eusko Ikaskuntza <<https://www.eusko-ikaskuntza.eus/en/solasaldiak/los-vlaz-en-argentina-su-contribucion-al-desarrollo-productivo-y-comercial-iii/ea-0657015001C/>>2024 年 10 月 3 日閲覧.
- Egaña Goya, Miren. (1992). “Basque Toponymy in Canada,” *Onomastica Canadiana*, 74(2): 53-74.
- Euskaltzaindia (2005). *Euskal deiturak. Noiz eguneratua: 2005-12-20*. Euskaltzaindia <<https://www.otamotz.eus/site/files/2012/02/deiturak.pdf>> 2024 年 8 月 15 日閲覧.
- Goikoetxea Gazpio, Irma. (2006). *Tolosako leku-izenak: Baserri guztien argazkiak*. Tolosa: Tolosako udala.
- Gorrotxategi Nieto, Mikel (2008). “Toponimia ikerketak: prozedura eta urratsak,” *Euskera ikerketa aldizkaria*, 53(3): 663-691.
- Gorrotxategi Nieto, Mikel (2023). “Toponimia vasca en América Latina,” *Onomástica desde América Latina*, 4(1): págs. 1-34
- IGN: Instituto Geográfico Nacional (2024). *Principios y directrices para la definición de nombres geográficos de la República Argentina*. Ver. 2.0, República Argentina.
- INDEC: Instituto Nacional de Estadística y Censo (2003). *¿Qué es el Gran Buenos Aires?* Buenos Aires: INDEC.
- INDEC: Instituto Nacional de Estadística y Censo (2024). *Censo Nacional de Población, Hogares y Viviendas 2022: Región Metropolitana Buenos Aires: Ciudad Autónoma de Buenos Aires y 39 partidos de la provincia de Buenos*. Buenos Aires: INDEC.
- Juliarena, Cristina Esther (1998). “Toponimia vasca en la Ciudad de Buenos Aires: Un pasado latente,” *Contribuciones Científicas. Congreso Nacional de Geografía 59º Semana de Geografía GAEA*, Buenos Aires: Sociedad Argentina de Estudios Geográficos, pp. 269-272.
- Juliarena, Cristina Esther (1995). “Toponimia y Cartografía: Los nombres vascos en la Patagonia: Una metodología de trabajo,” *Contribuciones Científicas. I Congreso Argentino de Geociencias y Geotécnicas. IX Congreso Nacional de Cartografía*. Buenos Aires: CAC Centro Argentino de Cartografía, pp. 110-118.
- Juliarena, Cristina Esther (1993). “Temática de investigación: La toponimia vasca en la República Argentina,” *Eusketxe Argibideak Informaciones Eusketxe*, 1: pp. 17-19.

- Kultura Saila (2008). *IV. Inkesta soziolinguistikoa 2006*. Vitoria-Gasteiz: Eusko Jaurlaritzaren Argitalpen Zerbitzu Nagusia.
- Loewen, Brad and Vincent Delmas (2012). "The Basques in the Gulf of St. Lawrence and Adjacent Shores," *Canadian Journal of Archaeology*, 36(2):213-266.
- López-Mugartza Iriarte, Juan Karlos (2018). "Recogida de los nombres de las casas del valle de Roncal según el proyecto Alaze-Aezoe," Cuadernos de etnología y etnografía de Navarra 50(92): 313-365.
- Matxikote Etxeberria, Maider (2023). *Oikonomia eta toponimia lantzen Lehen Hezkuntzako laugarren mailan*. [Master's Thesis, Nafarroako Unibertsitate Publikoa] GGZF <<https://academica-e.unavarra.es/entities/publication/dcb3fe23-011b-4dc6-9314-76906aeab5ae>>.
- Marcos, Mariana and Gustavo Daniel Buzai (2022). "Región Metropolitana de Buenos Aires," Guillermo Velázquez, Claudia Mikkelsen and Santiago Linares (eds.) *Atlas histórico y geográfico de la Argentina. Calidad de Vida*. II, Tandil: Universidad Nacional del Centro de la Provincia de Buenos Aires, pp. 657-674
- Mitxelena Elissalt, Koldo (1989). *Apellidos vascos*. 4ª edición, San Sebastián: Txertoa.
- Ministerio de Infraestructura, Vivienda y Servicios Públicos (2006). *Lineamientos Estratégicos para la Región Metropolitana de Buenos Aires*. Plan Estratégico Territorial. La Plata: Gobierno de la Provincia de Buenos Aires.
- Salazar Zubia, Luis de (1916). *Origen de 300 apellidos castellanos y vascongados: Estudio al que preceden algunos comentarios al libro titulado "Bienandanzas e Fortunas" que escribió Lope García de Salazar*. Bilbao: Tip. de Emeterio Verdes.
- Salaberri Zaratiegi, Patxi (2011). "Sobre el sufijo occidental -ika y otras cuestiones de toponimia vasca," *Fontes Linguae Vasconum. Studia et documenta*, 113: 139-176.
- Vilella y Sánchez Viamonte, Mriano (2016). "El barrio de Avellaneda en Sopena y el fundador del linaje en el Río de la Plata," *Revista Genealogía Familiar* 9: 83-109.